



埼玉県のマスコット コバトン

ライプ・レター  
**Lib. Letter**

2013 Winter [12～2月]季刊

平成25年11月23日 通巻 第34号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

## ふだしよ 札所

### みちしるべ — 祈りの旅の道標 —

「巡礼」と聞くと、メッカとかエルサレムとか、外国の宗教が思い浮かぶ人が多いかも知れません。しかし、実は日本でも古来から巡礼は行われてきました。それは、通称「札所」と呼ばれる霊場（巡拝地）を巡るもので、その主な起源は仏教によるものとされています。埼玉県でも、「坂東三十三所巡り」や「秩父三十四所巡り」などと呼ばれる巡拝地として、多くの札所が設けられています。

札所（霊場）とは、いったいどのようなところなのでしょう。また、その札所を巡る日本の「巡礼」とはどのようなものなのでしょう。今回は、ごく簡単にではありますが、札所とそこを巡る巡礼の旅についてご紹介してみることにとしましょう。



## ■ 「巡礼」と「札所」

### ◆ 「巡礼」とは

聖地や霊場を順に参拝して信仰を深め、心身のよみがえりと新生の体験や利益を得るための宗教行為を「巡礼」と言います。参拝場所は宗教の発祥地、本山の所在地、聖者や聖人の居住地や墓、奇跡や霊験を伝える場所などで、それらを巡（順）拝することを通して祈願の成就と贖罪や滅罪の効果を期待するものです。巡礼の旅に出るときは、精進潔斎して禁欲を保ち、巡礼姿と呼ばれる特定の服装をすることが一般的ですが、最近ではごく普通の服装で参詣することも珍しくないようです。

巡礼は日本では「順礼」とも書き、西国、坂東、秩父などの三十三観音巡礼や四国八十八ヵ所巡拝のように、巡るお寺だけでなくその順序まで番号順に定まっているものから、全国 66 ヵ所の代表的な聖地に法華経を一部ずつ奉納する「六十六部」のように、巡拝のコースや対象となる神社寺院さえもはっきりとは決まっていないものまで、非常にさまざまです。さらには、特に巡拝地を定めず、単に各地に散在する聖地を巡り歩く、巡礼霊場としてのまとまりをほとんど持たない巡拝にも、古くから「巡礼」という用語が使われてきました。

### ◆ 「巡礼」の種類

巡礼は、巡拝する聖地の性格から3種ほどに大別できます。

- (1) **本尊巡礼** 特定の性格を持つ神仏を巡拝する巡礼です。観音菩薩を本尊とする寺や堂のみを巡る三十三観音巡礼をはじめとして、六地藏、九品仏、四十八阿弥陀巡礼などがこれにあたります。

- (2) **祖師巡礼** 特定の宗派の開祖や高僧にゆかりの寺々を巡る巡礼です。有名な四国八十八カ所霊場は、真言宗の開祖空海（弘法大師）ゆかりの寺 88 カ寺を選んで巡る巡礼コースですし、ほかに親鸞聖人二十四輩、法然上人二十五霊場などもあります。
- (3) **名跡巡礼** 上の二つのタイプと違い、単に宗教上の名跡を歩くものです。前述の六十六部もこれにあたります。他に南都七大寺巡礼や日蓮宗二十一カ寺巡りなどがあります。

また、各地におびただしく新霊場が開かれるのも、日本における巡礼地の特色です。中世以降、大衆の信仰心が高まるにつれ、遠くまで足を延ばすことが困難であった人々にも比較的近場で同様の行為ができるようにと、「うつし（写し/移し）霊場」と呼ばれるものが全国各地に作られました。その数は数百ともいわれ、現在でもその多くが残っているほか、新たに霊場を名乗る地域も出てきています。

### ◆「巡礼」の特徴と作法・歴史

巡礼装束としては白い行衣に笈摺あしずりを着、笠、杖を持つという姿が一般的です。杖は、上端に五輪塔をかたどったものが多く、途中で行き倒れたときには仮の墓標とされることもありました。杖や笠に「同行二人」と記すのは、四国遍路に始まったと考えられている風習で、常に神仏（本来は弘法大師）と二人連れという意味ですが、のちには巡礼一般に広まりました。神仏に見守られつつ共に行脚する旅であるところに、日本の巡礼としての特色が見られると言えるでしょう。

また、笠には「迷故三界城、悟故十方空、本来無東西、何処有南北」と書きます。この文言は真言宗や禅宗の葬儀で棺や天蓋に書く四句の偈げで、死装束にもなる白衣や杖とあわせて巡礼者の死を象徴しています。つまり巡礼とは、巡礼者が霊場を巡る間は仮の死の状態にあり、そこから新たに生まれ変わろうとする習俗なのです。「日常からの離脱と復帰への儀式」という考え方もできるでしょうか。

日本における巡礼の始まりは平安時代にまでさかのぼることができますが、室町時代ごろから次第に盛んになり、近世にはいと爆発的ともいえるほどに流行するようになりました。庶民の経済力が向上したことや、道路・宿泊施設の整備などの諸条件が整ったことが主な要因であるといわれています。

また、「接待」と称して巡礼に金品を与える習俗も生まれました。それによって自らも参詣の一翼を担い、近親者の追善供養やさまざまな願いを果たそうとするものです。このようにして、巡礼の風習は巡礼者ばかりでなく、それを迎える側の人々の信仰にも支えられて今日まで続いてきたのです。

### ◆「札所」と「納札」

巡礼霊場の巡拝地を一般に「札所」といいます。これはそこに参拝したしるしに小さな札（「納札」）を納めるところからきており、これは「納め札」「巡礼札」と呼ばれることもあります。納札は古くは木製で、巡拝地の柱などに釘で打ちつけたため、札所に詣でることを「札を打つ」ともいいます。



法養寺薬師堂納札

また、札所に参拝する大きな目的の一つに、経巻を札所に納めることがあります。特に定まった経典があるわけではなく、観音経や般若心経など、比較的ポピュラーなものが多いようです。納経するとそのしるしに「納経帳」に寺の宝印を押してもらえます。さらに、札所では「御詠歌（巡礼歌）」を唱えることもあります。これは札所ごとに定まったものがあり、写し霊場の場合には同じ番号の元の札所の歌をそのまま借用する場合と、新たにその霊場のために作られる場合とがあります。札所でこうした御詠歌がうたわれるようになったのは、江戸時代に入ってからのことと考えられています。

納札の中央には、その巡礼の名称、両端に出身地、名前、参拝年月日などを書くのが普通です。実は、巡礼者が通り過ぎる地域の人々にとっても、この札には大きな意味があったようです。例えば、四国地方では遍路の出盛りになると、沿道の村々が無料の接待所を設けて、遍路たちに金品を接待する習慣がありました。遍路はそれと引きかえに納札を

一枚渡し、村ではこうして集まった納札を縄の間に挟んで村の入口に張り渡し、魔除けとしていました。また接待として宿を提供したときも納札をもらい、これを門口にはって同じく魔除けとする風習もありました。つまり納札を介して地域社会と巡礼者は緊密に結びつき、その結びつきが巡礼の風習を支えてきたのです。

こうしたさまざまな巡礼のなかでも「観音巡礼」と「四国遍路」の二つは歴史的にも最も古く、また近世以降は庶民の間で非常に盛んになりました。この二つの札所巡礼について、もう少し詳しく見てみましょう。

### 海外の「巡礼」

キリスト教徒にとっての最大の聖地はエルサレムです。彼らは世界のどの地域に住んでいようと、一生に一度はエルサレムへの巡礼を夢見ます。同じことはイスラムにおけるメッカへの巡礼においても言えます。キリスト教徒やイスラム教徒にとって、エルサレムやメッカは文字通り世界の〈中心〉であり、彼らは文化や人種や言語の違いを超えて、さまざまな地域からこの中心に向かって巡礼の旅を試みます。つまり、キリスト教徒やイスラム教徒にとっての聖地巡礼は、世界の中心という一点に向かっての〈往復運動〉を意味し、これはいかにも一神教らしい行動類型と言えるでしょう。

これに対して、インドのような多神教的な文化風土では、複数の聖地を設定した〈円運動〉をとる傾向があります。紀元前後の頃に書かれた叙事詩『マハーバータ』によると、当時の代表的な巡礼路は、インド亜大陸全体に散在している聖地を右回りに巡り歩くもので、特に川の源流や合流点が神聖視されました。また、ヒンドゥー教最大の聖地の一つであるワーラナシー（ベナレス）では同心円状の巡礼路がいくつも作られており、巡礼者はそのコースを右回りに行脚します。一方、仏教の巡礼路は、釈迦の誕生（ルンビニー）、成道（ブッダガヤー）、説法（ワーラナシー）、入滅（クシナガラ）を記念する四大聖地を結びつけたものです

中国では古くから天台山や五台山への巡拝が発達し、その伝統は修行の場としての霊山巡拝として日本にも受け継がれていきました。そして中世以降になると観音三十三所巡礼と四国八十八ヶ所遍路が庶民の間で盛んになり、巡礼は修行者のものから庶民のものへと変化していったのです。

## ■観音巡礼と百観音の「札所」：西国・坂東、そして秩父

観音巡礼は、本尊巡礼の一種で、四国遍路と並んで最も人気のある巡礼形態の一つですが、中でも西国三十三観音、坂東三十三観音、秩父三十四観音が特に有名です。観音菩薩を本尊とした一連の霊場で、この三つを合わせて特に「百観音」と称しています。

### ◆西国三十三所

近畿地方に散在する観音信仰で有名な 33 ヶ所の霊場を、順番を追って参詣する巡礼コースで、西国三十三所観音霊場巡（順）礼と呼びます。観音霊場として有名な熊野那智の青岸渡寺を第 1 番とし、奈良や京都の古寺をはじめとする近畿地方一円を巡って岐阜県谷汲の山中にある 33 番華嚴寺に終わる、かなり長途の巡礼路です。観音の利益を求める修行者や信者たちによって、この巡礼は今日にまで伝えられ、独特の巡礼習俗を生むなど、全国的に大きな影響を与えてきました。

西国三十三所が巡礼路としての形を整えたのは、平安時代後期とされます。伝承によると、大和長谷寺の徳道上人、あるいは花山法皇が、仏道を求めて観音霊場を一巡したことに始まると伝えられるほか、三井園城寺の僧で、修験者として有名な行尊を創始とする説もありますが、創立年代等により信憑性が高いとされているのは、1161 年（応保 1）正月に三十三所を巡礼した後に『巡礼記』を記した覚忠によるというものです。覚忠は、公家として有名な九条兼実と、天台座主で『愚管抄』を著した慈円を兄に

もち、修験者としても注目された人物です。いずれにせよ、西国三十三所の観音霊場巡礼は、平安時代末期の12世紀ごろに成立したもので、その巡礼のコースは交通路などの関係で変更があったものの、霊場の寺はまったく変わることはありませんでした。

札所とされた霊場寺院を巡る経路は、紀伊国から美濃国まで数百里の道をたどるもので、山中、海岸、平野、都市と変化に富み、踏破することは日数、困難さともに大変な苦行であったことは想像に難くないでしょう。したがって、交通路もまだ整わない鎌倉時代までは、巡礼の主体は聖や修験者などの修行者でした。やがて南北朝の内乱が終わるころから、地方の武士たちを主とする俗人が、次第に西国三十三所の観音巡礼に上るようになります。特に応仁の乱後はこの傾向が強くなり、「巡礼の人、道路織るが如し」(『竹居清事』)といわれるほどの盛況を見せました。巡礼者には関東地方をはじめとする東国の人々が多く、そのために「西国」という冠称がこのころに一般化したとみられています。江戸時代になると、農民や商人、はては乞食にいたるまでの幅広い階層の人々が巡礼の旅に出るようになり、やがて西国三十三所が坂東三十三所、秩父三十四所とともに日本百観音霊場として組みあげられると、交通路の整備と庶民の経済的安定に伴い、巡礼が空前の賑わいを見せるようになりました。

そして、このような巡礼の流行に刺激されて、多くの地域的な巡礼コースが新たに生まれる現象が起きました。これらは、一国単位だったり、あるいは島や半島、川筋、湖の周辺、平野の縁辺などに沿って設けられ、西国三十三所「写し」の霊場と呼ばれたのです。

#### ◆<sup>ばんとうさんじゅうさんかしょ</sup>坂東三十三所

坂東三十三カ所観音霊場巡(順)礼ともいい、関東地方一円に広がる観音霊場を巡る巡礼コースです。後に、西国三十三所、秩父三十四所とともに日本百観音霊場を構成することになりました。由来については、花山法皇の関東下向説などが伝えられていますが、これは西国三十三所の内容とよく似ていることや、花山法皇の関東下向は確かな文献もなく、坂東札所をその当時に定めた形跡もないことから、西国における花山天皇伝説を坂東へ移植したものと考えられています。

坂東札所が成立したのは鎌倉時代の初頭で、将軍源頼朝の観音信仰を契機としたとも言われています。鎌倉時代にこの霊場を参籠しながら巡礼したのはもっぱら修行僧で、一般の人々が参加するのは14~15世紀のころになります。これは、坂東札所が現在の<sup>やみぞさん</sup>一都六県にわたる広い範囲に点在し、交通の不便な山上の八溝山や日光の中禅寺、房総の内陸部など、訪ねにくいところが多かったためではないかと考えられます。

足利市の<sup>ばんなじ</sup>鑿阿寺には当時の巡礼札が納められ、武士や庶民の名が記されているのがみられます。江戸時代になると、町人や農民の巡礼で大いに賑わったそうです。坂東三十三所の霊場寺院には、平安時代末期すでに成立していた名刹が多く、立木観音、なた彫像、石像など、関東特有の伝統と様式をもつ観音像がみられるのが特徴です。

#### ◆<sup>ちちぶさんじゅうよんかしょ</sup>秩父三十四所

秩父三十四所観音霊場ともいい、埼玉県秩父盆地に点在する34カ所の観音霊場を巡る巡礼コースです。秩父札所のおこりは、1234(文暦元)年(甲午)3月18日開創と伝えられますが、百観音霊場の中では西国三十三所、坂東三十三所よりも後に成立したものと考えられています。熊野の青岸渡寺から始まった観音巡礼の旅は、西国、坂東、秩父の霊場を経て、秩父34番の水潜寺<sup>すいせんじ</sup>で百観音巡礼としてついに結願することになるわけです。



秩父34番水潜寺観音堂

秩父の霊場は、そのほとんどが大寺院で占められる西国、坂東とは異なって、小規模の寺や堂からなり、地方的な色彩が濃いのが特徴です。この巡礼路は、もともと秩父妙見宮(秩父神社)を取り巻くように構成された地域的なもので、1488年(長享2)の番付表のころには、霊場の数はまだ33カ所でした。秩父33カ所の霊場が34

カ所となり、百観音に組み込まれたのは16世紀とみられ、30番<sup>ほううんじ</sup>法雲寺に伝わる1536年(天文5)の納札には、西国・坂東・秩父百カ寺巡礼の記事があります。また、札所が34カ所に再編成される過程で巡路も変更され、定峯峠を越えた最初の妙音寺<sup>みょうおんじ</sup>(四萬部寺<sup>しまぶじ</sup>)が1番となりました。

また、もう一つの特徴として、秩父の霊場には曹洞宗に属する寺が多いことがあげられます。他の観音霊場が真言宗や天台宗の寺院を中心に構成されているのに比べ、秩父の場合には34札所中、曹洞宗が20カ寺、臨済宗が11カ寺と実に31カ寺が禅宗の寺で、真言宗は荒川流域に3カ寺あるのみです。これは禅僧による積極的な働きかけによって秩父札所が百観音に組み込まれたことを示すものと言えるでしょう。また、戦国期の秩父が関東口の山地で騎馬戦用の馬の産地で、それに関わる当地の地主層でもあった在地の武士の信仰形態が、浄土宗から禅宗に変わっていったのが原因という話もあります。

江戸が繁栄期を迎えると、関所を通らずに気やすく他国の情緒に浸れることから、秩父の巡礼に出る人々が増加しました。「江戸で夕飯を食べて舟に乗れば、翌朝早く川越の新河岸に着いた」と言われるほど交通の便がよくなると、特に御殿女中や商家の娘たちが短期間の巡礼の旅を秩父に求めたとされています。元禄期や文化・文政期には、一日に2~3万にのぼる人々が秩父札所を回ったという記録が残っているそうです。

また、秩父霊場が創始されたという1234年(文暦1)が午年であることから、午年には観音の総開帳が行われ、参詣者が特に群参しました。2014(平成26)年も午年に当たりますので、この号が発行される頃は、ちょうど12年に一度の絶好の機会に当たると言えます。高山に囲まれた秩父盆地は、観音の聖地としての景観を備えつつ、全行程で約100kmと比較的短く、徒歩でも6日程度で巡拝が可能なことから、現在でも人気を博しています。

### 『観音経』と「三十三」の意味

観音霊場が「三十三」を名乗ることが多いのは、信仰対象である観世音菩薩について記された『法華経観世音菩薩普門品<sup>かんぜおんぼさつふもんぼん</sup>(観音経)』の中に、その数字が重要な意味を持ってあらわされているからです。その中では、観音菩薩は世界で数多くの衆生を救うため、それぞれの対象を救うに相応しい姿を現して救いをもたらすとされています。その化身の種類は、三聖身、六天身、五人身、四部衆身、四婦女身、二童身、八部衆身、執金剛身という8種33身とされており、それぞれ仏、天界人、人間界、仏教者、女性、子ども、仁王の姿を表します。ちなみに、説法の中にはこの他に「人・非人<sup>だん・ひにん</sup>」という表現もあり(通常は前者のいずれかに含まれるとされています)、もしこれを別種と数えればその数は35になるという説もあります。一応33という数は示してあるものの、重要なのは数ではなく、実際にはありとあらゆる無数の姿になって衆生を救ってくださると考えるのが自然な解釈と言えるでしょう。

## ■「遍路」の札所：四国八十八カ所巡礼

祖師巡礼の一種で、四国の島内に散在する、弘法大師(空海)ゆかりの霊場88カ所を、順を追って参詣する巡礼コースのことをいい、四国八十八カ所弘法大師霊場とも称します。一般にはこれを特に〈遍路(辺路)〉〈お四国〉などと呼んで、ほかの「巡礼」と区別しています。(また、「遍路」が巡礼者自身を示すこともあります。)


第1番札所は阿波(徳島県)の霊山寺<sup>りょうぜんじ</sup>で、ここから土佐(高知県)、伊予(愛媛県)、讃岐(香川県)



をまわり、山深い大窪寺で結願します。このように四つの国にわかれる巡路は、仏教の思想にもとづいて、阿波を発心の道場、土佐を修業の道場、伊予を菩提の道場、讃岐を涅槃の道場と意義づけられています。全行程 1400 km 以上、歩くと 60 日余りもかかるこの道を辿ると、おのずから仏教の修行が果たされるとされ、山岳、海岸、平野など、地理的変化に富んだ遍路の行程は、仏教修行の厳しさそのものであると言えます。

由来としては、弘法大師が 42 歳の厄年に四国を一巡して、88 の霊場を定めたと伝えられます。これらの寺々を巡拝する遍路のならわしは、弟子の真済が大師の遺跡を巡ったのが始まりともいわれ、あるいは鎌倉時代に衛門三郎が始めたという伝説もあります。しかし、これらの霊場が庶民も参詣できる巡礼路として整えられたのは室町時代のことで、それまでは、弘法大師の遺徳を慕う僧侶たちが、四国各地の山野を歩いて修行していたと考えられています。

「八十八」という数字には、「米」の字を分解したという説や、男厄 42 歳、女厄 33 歳、子どもの厄 13 歳を加えた数という説などがあり、根拠は明らかではありません。また、霊場の順番については、江戸初期に出版された『四国遍礼霊場記』では、讃岐国善通寺を 1 番札所としています。これが今日のように霊山寺から始まる形をとるようになったのは、大阪方面から船で渡ってくる多くの遍路の便を考えたからでしょう。

遍路は歴史的に独特な巡礼習俗を生み、他の巡礼に影響を与えたものも少なくありません。遍路の出で立ち他は他の巡礼と同様ですが、金剛杖には「南無遍照金剛」と弘法大師の宝号を記し（この宝号は納札にも記されています。）、笠には「同行二人」と住所氏名を書きます（これは後に観音巡礼等にも広まりました。）。  


札所の巡り方にも、番号順にたどる「順打ち」と 88 番から逆にたどる「逆打ち」とがあります。また、88 カ所の札所を国別に 4 度に分けてまわる一国参りや、主要なコースを部分的に遍路する七カ寺、十三カ寺、十七カ寺詣でなども行われています。

江戸時代には、一生に一度のお蔭参りとして、伊勢参宮かたがた、百観音（西国、坂東、秩父）とお四国をまわることも広く行われました。3 月から 5 月ごろにかけて、米、餅、惣菜、草履など、食糧や身の回りの物を遍路に供養する、接待の風習も多く見られ、四国遍路では今でも接待の風習が広く生きています。

## ■さまざまな「札所」と巡礼

これまでに紹介した観音巡礼や四国遍路のほかにも、日本全国でさまざまな巡礼や札所巡りの風習が伝えられています。それらのいくつかは有名な観音巡礼や四国遍路の「写し」であったりし、またあるいはまったく別の諸尊を祀る地の巡礼であったりもします。中には、遠く台湾にまで広がっていった観音巡礼も見られます。さらに、仏教ではなく神道的な七福神を巡る巡礼なども多数見られます。

埼玉県内にも、坂東および秩父の札所以外に多くの札所／霊場があり、それを紹介した資料も多数発行されています。観音霊場や四国遍路の「写し」はもちろん、石仏巡礼など興味深い巡礼も紹介されています。この国に住む人たちの、はるか昔から続いてきた信心の結晶としての「札所」に、一度足を運んでみてはどうでしょうか。

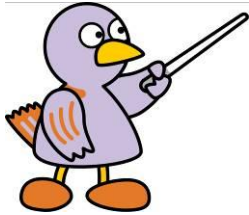
## 関連企画のお知らせ

県立熊谷図書館は、今回の関連展示として、以下のような施設と連携して展示企画を行っています。これらの展示も併せてごらんいただくと、より一層理解が深まることでしょう。



- ・埼玉県立歴史と民俗の博物館  
「錦絵と摺物で巡る埼玉の札所」  
期間：平成 26 年 1 月 2 日（木）～5 月 11 日（日）
- ・埼玉県立嵐山史跡の博物館  
「観音霊場と武士」  
期間：平成 25 年 12 月 7 日（土）～平成 26 年 2 月 23 日（日）
- ・埼玉県立浦和図書館  
「資料でたどる埼玉の札所」  
期間：平成 26 年 1 月 16 日（木）～2 月 19 日（水）

# 県立熊谷図書館にある今回の展示資料



## ～「札所」を知る～



※『書名』（著者名 発行者 出版年）【県立図書館の請求記号】  
掲載資料は、県立熊谷図書館2階ロビーで2月19日まで展示中です。

### ◆ 巡礼と「札所」

- ・『墨絵で歩く関東古寺巡礼』難波淳郎／著 新人物往来社 1988.12 【185/N48/】
- ・『講座日本の巡礼 第1巻』真野俊和／編 雄山閣出版 1996.5 【186.9/コ/】
- ・『巡礼と遍路（三省堂選書 58）』武田明／著 三省堂 1979.4 【186.9/シ/】
- ・『旅のなかの宗教（NHKブックス 364）』真野俊和／著 日本放送出版協会 1980.3 【186.9/ヲ/】
- ・『遍路と巡礼の民俗』佐藤久光／著 人文書院 2006.6 【186.9/ハ/】
- ・『信ずる心 9』松原泰道／責任編集 集英社 1987.6 【186.9/マ/】
- ・『巡礼・遍路がわかる事典』中山和久／著 日本実業出版社 2004.11 【186.91/シ/コ/】
- ・『聖地を巡る人と道』田中智彦／著 岩田書院 2004.3 【186.91/セ/】
- ・『全国霊場巡拝事典』大法輪閣編集部／編 大法輪閣 1997.6 【186.91/セン/】
- ・『日本巡礼ガイドブック』淡交社編集局／編 淡交社 2001.4 【186.91/ニホ/】
- ・『遍路と巡礼の社会学』佐藤久光／著 人文書院 2004.8 【186.91/ハ/】
- ・『全国三十三カ所観音霊場および全国八十八カ所霊場資料集』武石伊嗣／著 武石万里子／編 神谷書房 2006.1 【R185.91/セン/】
- ・「〈特集〉巡礼のこころ」『大法輪』45-10（1978年10月号）【雑誌】
- ・「〈特集〉新・巡礼のすすめ」『大法輪』64-6（2007年6月号）【雑誌】
- ・「〈特集〉日本の古寺大巡礼」『歴史読本』53-2（通巻824）（2008年2月）【雑誌】
- ・「〈特集〉観音巡礼と四国遍路」『大法輪』69-3（2012年3月号）【雑誌】

### ◆ 観音巡礼と百観音の「札所」：西国・坂東・秩父

（観音霊場）

- ・『観音霊場巡り（ふるさと文庫）』木塚治雄／著 筑波書林 1988.3 【186/Ki99/】
- ・『観音札所巡りのすべて（新しい生活全書）』平幡良雄／著 広済堂出版 1981.3 【186.9/カ/】
- ・『西国坂東観音霊場記（青蛙選書）』金指正三／校注 青蛙房 1973 【186.9/サ/】
- ・『観音巡礼のすすめ』清水谷孝尚／著 朱鷺書房 1983.4 【186.9/シ/】
- ・『巡礼と御詠歌』清水谷孝尚／著 朱鷺書房 1992.10 【186.9/シ/】
- ・『ドライブ西国三十三カ所・武蔵野三十三観音』札所研究会／編 1970 【186.9/ト/】
- ・『札所めぐりの旅』竹村節子／著 日本交通公社出版事業局 1982.2 【291.09/ヲ/】
- ・『日本山岳名著全集 第2』あかね書房 1962 【291.09/ニ/】
- ・『伊勢から熊野へ』三重県政策広聴広報課 2000.3 【291.56/セ/】
- ・『百観音札所巡礼』南良和／〔ほか〕編 佼成出版社 1988.7 【S185/セ/】
- ・『坂東三十三カ所・秩父三十四カ所めぐり（JTBキャンブックス）』安宅夏夫／〔文〕 日本交通公社出版事業局 1997.9 【BM186/】
- ・『百観音の旅』谷村俊郎／著 1975 【BM186/】

- ・「百観音霊場」巡り『サライ』10-8（通巻207）（1998年4月16日号）【雑誌】
  - ・「桜満開の観音札所を歩く」『サライ』23-4（通巻530）（2011年4月）【雑誌】
- （西国三十三カ所）
- ・『西国三十三カ所巡礼（とんぼの本）』井上隆雄／著 新潮社 1988.3【185.9/㍉】
  - ・『西国巡礼の寺（カラーブックス 825）』三浦美佐子／共著 保育社 1992.3【B185.9/㍉】
  - ・『観音のこころ』松原哲明／著 佼成出版社 1986.10【186/Ma73/】
  - ・『カラー巡礼の旅』佐和隆研／文 淡交社 1974.6【186.9/㍉】
  - ・『西国三十三カ所（古寺巡礼シリーズ 1）』平幡良雄／著 満願寺事業部 1980.11【186.9/㍉】
  - ・『御詠歌の旅（Izumi books 1）』和田嘉寿男／著 和泉書院 1998.4【186.916/コエ】
  - ・『西国 33カ所札所めぐり（Prime books）』橋本哲二／著 保育社 1997.9【186.916/㍉イ】
  - ・『西国三十三所』西国札所会 1995.9【186.916/㍉イ】
  - ・『西国巡礼』白洲正子／著 風媒社 1997.12【186.916/㍉イ】
  - ・『享和元年西国巡礼旅日記』舞阪町立郷土資料館 2004.9【291.6/ㇿヨ】
  - ・『西国巡礼紀行』中西芳朗／著 東京堂出版 1974【291.6/㍉】
- （坂東三十三カ所）
- ・『坂東 33カ所（カラーブックス 597）』清水谷孝尚／著 保育社 1983.2【B186.9/㍉】
  - ・『坂東三十三カ所（古寺巡礼シリーズ 2）』平幡良雄／著 札所研究会 1974.9【186.9/㍉】
  - ・『坂東三十三所観音巡礼』坂東札所霊場会／編 朱鷺書房 1987.4【S186/㍉】
- （秩父三十四カ所）
- ・『秩父三十四カ所（古寺巡礼シリーズ 3）』平幡良雄／著 1970.3【186//】
  - ・『秩父三十四カ所考』河野善太郎／著 埼玉新聞社 1984.3【186.9/㍉】
  - ・『秩父の札所』坂本時次／著 堀口英昭／写真 1972【186.9/㍉】
  - ・『秩父 34カ所（カラーブックス 809）』竹村節子／著 保育社 1991.4【B186.9/㍉】
  - ・『空からの巡礼・秩父三十四カ所』朝日新聞浦和支局／編 さきたま出版会 1984.6【291.3//】
  - ・『秩父の札所』坂本時次／著 木蘭舎 1988.7【291.34/㍉】
  - ・『埼玉叢書 第6巻』稲村坦元／編 国書刊行会 1972【S080/㍉】
  - ・『絵本秩父の札所』池原昭治／絵と文 木馬書館 1979.12【S186/㍉】
  - ・『秩父幻想行』清水武甲／写真 木耳社 1968【S186/㍉】
  - ・『秩父古寺を歩く』室生朝子／著 新人物往来社 1987.7【S186/㍉】
  - ・『秩父三十四ヶ所観音巡礼』秩父札所連合会／編 朱鷺書房 1988.3【S186/㍉】
  - ・『秩父 34カ所霊場めぐり』大貫茂／著 日地出版 1994.6【S186/㍉】
  - ・『秩父三十四観音』久保利雄／著 国書刊行会 1983.4【S186/㍉】
  - ・『秩父三十四カ所めぐり（Ars books 13）』婦人画報社／編 婦人画報社 1994.6【S186/㍉】
  - ・『秩父路の信仰と霊場』栗原伸道／著 国書刊行会 1981【S186/㍉】
  - ・『秩父巡礼みち（シバ巡礼シリーズ 1）』柴田博／著 シバ 1994.5【S186/㍉】
  - ・『秩父の札所』坂本時次／文 木蘭舎 1996.4【S186/㍉】
  - ・『秩父の札所』池原昭治／絵・文 木馬書館 1996.11【S186/㍉】
  - ・『秩父札所の今昔』秩父札所の今昔刊行会 1968【S186/㍉】
  - ・『秩父巡礼ひとり旅』福田常雄／著 現代書林 1981.9【S186/㍉】
  - ・『秩父霊場資料展・展示目録』埼玉県立熊谷図書館 1987.11【S186/㍉】
  - ・『目で見る秩父札所』磯部謹作／著 〔磯部謹作〕 1985【S186/㍉】
  - ・『埼玉の札所めぐり』埼玉県立博物館 1997.3【S186.9/㍉イ】
  - ・『ちちぶおもてなしマップ』秩父市 〔200-〕【S186.9/㍉イ】
  - ・『秩父巡礼道マップ&ガイド』井上光三郎／編 幹書房 2002.6【S186.9/㍉イ】
  - ・『秩父札所』清水史郎／著 さきたま出版会 2000.3【S186.9/㍉イ】
  - ・『秩父札所めぐり（見て歩きシリーズ 6）』井上光三郎／文・写真 幹書房 2000.3【S186.9/㍉イ】
  - ・『秩父三十四観音めぐり』山田英二／著 大蔵出版 1996.3【BM186//】
  - ・『秩父札所めぐり』栗原胡秋／著 西武鉄道観光部 1962.5【ア S186/㍉】
  - ・『秩父観音霊場納経帳』秩父札所連合会 1967【ア S186/㍉】



- ・『秩父順礼』秩父札所十三番 1936.10 【アS186/㍿】
- ・『秩父札所関係文書（秩父観音叢書 第2集）』秩父観音奉賛会 [19-] 【イS186/㍿】
- ・『秩父観音霊場研究序説』矢島浩一／著 豊昭学園 1966 【イS186/㍿】
- ・『秩父三十四所観音霊験円通傳研究 [その1]』矢島浩／著 矢島浩 1965 【イS186/㍿】
- ・『秩父三十四所観音霊験円通傳研究 その2』矢島浩／[著] 矢島浩 1965 【イS186/㍿】
- ・『内田氏資料による秩父観音霊場』矢島浩／著 矢島浩 [1965] 【イS186/㍿】
- ・「〈旅紀行〉 クローズアップ秩父路」『歴史と旅』27-14（通巻426）（2000年11月号）【雑誌】
- ・佐藤久光「秩父札所その歴史と魅力（上）」『大法輪』74-5（2007年5月号）【雑誌】
- ・佐藤久光「秩父札所その歴史と魅力（中）」『大法輪』74-6（2007年6月号）【雑誌】
- ・佐藤久光「秩父札所その歴史と魅力（下）」『大法輪』74-7（2007年7月号）【雑誌】

#### ◆ 「遍路」の札所：四国八十八カ所巡礼

- ・『四国八十八カ所ウォーキング』JTBパブリッシング 2005.6 【186/シコ】
- ・『カラー遍路の旅』佐和隆研／文 淡交社 1976 【186.9/㍿】
- ・『講座日本の巡礼 第2巻』真野俊和／編 雄山閣出版 1996.8 【186.9/コ】
- ・『四国八十八カ所仏画巡礼』小松庸祐／編著 朱鷺書房 1990.6 【186.9/コ】
- ・『四国八十八ヶ所霊場案内』垂水克登／編 池田書店 1986.6 【186.9/シ】
- ・『四国遍路の民衆史（歴研ブックス）』山本和加子／著 新人物往来社 1995.12 【186.9/シ】
- ・『四国遍路八十八カ所』首藤一／著 創元社 1978.4 【186.9/シ】
- ・『死装束の旅』中国新聞社 1977.10 【186.9/シ】
- ・『巡礼地の世界』田中博／著 古今書院 1983.3 【186.9/シ】
- ・『四国八十八カ所 上／下（古寺巡礼シリーズ4）』平幡良雄／著 1971 【186.9/ヒ】
- ・『四国遍路とはなにか（角川選書454）』頼富本宏／著 角川学芸出版 2009.11 【186.91/シコ】
- ・『四国お遍路の歩き方』朝倉光太郎／著 PHP研究所 1997.8 【186.918/シコ】
- ・『四国八十八カ所を歩く』へんろみち保存協力会／監修 山と溪谷社 2003.7 【186.918/シコ】
- ・『四国遍路の研究』白木利幸、頼富本宏／著 国際日本文化研究センター 2001.3 【186.918/シコ】
- ・『四国遍路八十八の本尊』櫻井恵武／著 日本放送出版協会 2002.4 【186.918/シコ】
- ・『へんろ功德記と巡拝習俗』浅井證善／著 朱鷺書房 2004.1 【186.918/ヒ】
- ・『四国へんろ（カラーブックス775）』薄井八代子／著 保育社 1989.4 【B186/U95】
- ・『四国八十八カ所霊場めぐり（講談社カルチャーブックス74）』講談社 1993.4 【BM186/】
- ・「〈特集〉四国八十八カ所遍路の旅」『太陽』38-8（No.478）2000年8月号【雑誌】
- ・「〈特集〉空海・密教・四国遍路」『大法輪』67-2（2000年2月号）【雑誌】
- ・「〈特集〉四国遍路」『サライ』19-8（通巻439）（2007年4月19日号）【雑誌】

#### ◆ さまざまな「札所」と巡礼

- ・『法然上人二十五霊場巡礼』法然上人二十五霊場会／編 朱鷺書房 1994.9 【185/㍿】
- ・『八王子三十三観音霊場』西田鼎江／著 揺籃社 1993.4 【185/N81】
- ・『近江33カ所（カラーブックス581）』相馬大／共著 保育社 1982.9 【B185/So36】
- ・『新西国霊場法話巡礼』新西国霊場会／編 朱鷺書房 1993.8 【185/Sh76】
- ・『江戸三十三観音めぐり』山田英二／著 大蔵出版 1992.8 【185/Y19】
- ・『九州西国観音巡礼』近藤弘訓／著 朱鷺書房 1996.4 【185.9/㍿】
- ・『四国別格二十霊場巡礼』四国別格二十霊場会／編 朱鷺書房 1991.7 【185.9/ト】
- ・『越後三十三観音札所巡礼の旅』佐藤高／編著 高橋与兵衛／仏像撮影 1988.2 【186.9/㍿】
- ・『江戸・東京札所事典』塚田芳雄／著 下町タイムス社 1989.7 【186.9/㍿】
- ・『講座日本の巡礼 第3巻』真野俊和／編 雄山閣出版 1996.11 【186.9/コ】
- ・『西国愛染十七霊場巡礼』西国愛染霊場会／編 朱鷺書房 1994.4 【186.9/㍿】
- ・『信濃三十三札所めぐり』柿木憲二／著 郷土出版社 1991.12 【186.9/シ】

- ・『釈迦三十二禅刹巡拝』釈迦三十二禅刹会／編 朱鷺書房 1996.11 【186.9/シ】
- ・『出羽百観音』後藤博／著 みちのく書房 1996.8 【186.9/ゲ】
- ・『最上三十三カ所（古寺巡礼シリーズ 8）』平幡良雄／著 1975 【186.9/ヒ】
- ・『利根運河大師ガイドブック』利根運河大師護持会 2003.3 【186.9135/ト】
- ・『大江戸めぐり御府内八十八ヶ所』和田信子／著 集英社 2002.9 【186.91361/材】
- ・『中部四十九薬師巡礼』中部四十九薬師霊場会／編 朱鷺書房 1999.3 【186.915/チ】
- ・『役行者霊蹟札所巡礼』役行者霊蹟札所会／編 朱鷺書房 2002.10 【186.916/エン】
- ・『西国薬師巡礼』井上博道／撮影 光村推古書院 1998.11 【186.916/サ】
- ・『吉野・大峯の古道を歩く（歩く旅シリーズ街道・古道）』山と溪谷社 2002.10 【186.9166/ヨ】
- ・『中国四十九薬師巡礼』中国四十九薬師霊場会／編 朱鷺書房 1997.10 【186.917/チ】
- ・『備前の霊場めぐり（岡山文庫 151）』川端定三郎／著 日本文教出版 1991.7 【B186.9175/ヒセ】
- ・『備中の霊場めぐり（岡山文庫 162）』川端定三郎／著 日本文教出版 1993.2 【B186.9175/ヒツ】
- ・『美作の霊場めぐり（岡山文庫 185）』川端定三郎／著 日本文教出版 1997.2 【B186.9175/ミマ】
- ・『台湾三十三観音巡拝』東海亮道／編 朱鷺書房 2004.3 【186.9224/タイ】
- ・『下野三十三札所巡りと小さな旅』下野新聞社／編 1992.8 【291.32/Sh54】
- ・『同行二人（どうぎょうににん）』飯島一彦／文 原山尚久／絵 銀河書房 1976 【291.52/イ】
- ・『観音巡礼』山田計司／著 さきたま出版会 1993.3 【S186/カ】
- ・『さいたまの巡り案内』埼玉県商業観光課 [19-] 【S186/サ】
- ・『埼玉東八十八霊場巡り』渡辺良夫／著 さきたま出版会 1988.11 【S186/サ】
- ・『庄和の巡礼』埼玉県立庄和高等学校地理歴史研究部 1993.9 【S186/シ】
- ・『庄和の百神 石仏信仰編』埼玉県立庄和高等学校地理歴史研究部 1992.9 【S186/シ】
- ・『関東古寺巡礼』難波淳郎／著 1976 【S186/チ】
- ・『旛羅郡新四国八十八カ所霊場』長谷川惣平／著 聖天山歓喜院 1973.10 【S186/チ】
- ・『羽生領二十一ヶ所札所めぐり』羽生市教育委員会 1988.3 【S186/チ】
- ・『「足立八十八カ所弘法大師霊場」と「新四国八十八カ所弘法大師霊場」札所の所在とその変遷について』川島浩／〔著〕 川島浩 [2012] 【S186.9/チ】
- ・『児玉三十三霊場めぐり』児玉三十三霊場奉賛会 2009.6 【S186.9/コ】
- ・『浦和市史研究 第6号』浦和市総務部市史編さん室 1991.3 【S211/ウ】
- ・『大宮の郷土史 第12号』大宮郷土史研究会 1989.3 【S213/ウ】
- ・『大宮の郷土史 第15号』大宮郷土史研究会 1993.3 【S213/ウ】
- ・『八潮市史研究 第4号』八潮市史編さん委員会／編 八潮市史編さん室 1982.3 【S275/ウ】
- ・『府内八十八ヶ所霊場道順記 下』鈴木清次郎／編 鈴木 清次郎 1901.10 【ア186.9/ウ】

#### ◆ 参考になる Web サイト

- ・坂東三十三観音公式サイト：<http://www.bandou.gr.jp/>
- ・秩父札所連合会公式サイト：<http://chichibufudasho.com/>
- ・四国八十八ヶ所霊場会公式ページ：<http://www.88shikokuhenro.jp/>

上記の資料は、埼玉県立図書館で所蔵している札所・巡礼関係資料のごく一部です。

お探しの資料がありましたら、お気軽にお問い合わせください。

